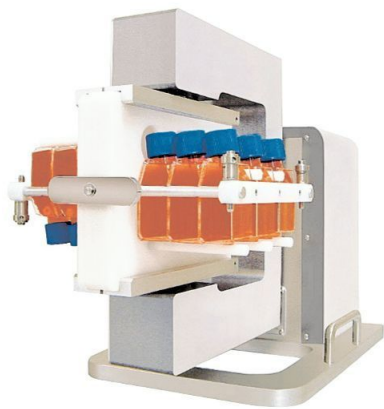


医療関連事業に参入

北川鉄工所

自動車、工作機械部品製造の北川鉄工所（府中市元町）は経営多角化の一環で、医療関連事業に参入した。第1弾として、失われた組織や臓器を修復する再生医療で利用される幹細胞の研究用の培養機を開発、国内の大学や研究機関などに売り込んでいる。今後、高齢化に伴って成長が見込める医療分野の研究装置の生産を増やし、2021年度に5億円の売り上げを目指す。（鳥越謙一）

第1弾 幹細胞培養機



北川鉄工所が開発した幹細胞の培養機

北川鉄工所によると、幹細胞は重力が小さいと幹細胞のまま増殖し、重力が大きいと筋肉、内臓といった特定の細胞への分化（成長）が進む。従来は増殖、分化の作業を別々の装置で行っていたが、新型機は縦、横方向の回転を加える機能を持たせることで増殖と分化の研究が1台で行えるのが特長という。

商品名は「Zeromo（ゼロモ）」。アルミ合金製で高さ32・1センチ、幅29・3センチ、奥行き46・2センチ。フラスコ（25ミリリットル）を18本セットでき、回転の方向や速度によってフラスコ内の重力を、地上の5倍から千分の1までの範囲で調節できる。価格は非公表。本社工場の既存設備を使い

ズーム

幹細胞 神経、軟骨、血液といった体を形づくるさまざまな組織

になる能力を持つ細胞。受精卵から作る胚性幹細胞（ES細胞）、皮膚の細胞に遺伝子を導入して作る人工多能性幹細胞（iPS細胞）など

があり、再生医療で研究が進んでいる。

国内研究機関へ販売

生産する。9月から販売を始めており、2台を納入した。初年度は、フラスコを6本セットできる小型機と合わせて10台の販売を計画している。

同社は11年、金属の精密加工技術が生かせる医療関連機器の専門部署を設け、広島県が医療と工学の医工連携を目指して設立した産学官組織「ひろしま医療関連産業研究会」に参加。培養機は広島大の研究成果などをヒントに開発した。

畑島敏勝取締役執行役員は「3～5年かけて再生医療関連の研究機器開発を積み重ねてから、臨床データの蓄積などが求められる医療機器へと業務を広げたい」と話している。

北川鉄工所は1941年設立。資本金86億4千万円。売上高528億4800万円（15年3月期）。従業員約1300人（パートなど含む）。